



藤戸 幸夫  
Yukio  
Fujito

<略歴>

1949年 旭川市に生まれる  
津別町在住。木彫り職人だった父のもとに生まれる。  
父の死をきっかけに15歳から木彫りを始めた。  
その後、一度彫刻を離れるものの、30歳を過ぎて  
また木彫りをはじめ、現在に至るまで木彫り作家として  
50年以上活躍している。  
“実用的な道具を作る”ことを信条に、丁寧に美しく作られた  
作品の数々は、多くの人を魅了してやまない。

(タシロを一番最初に作ったときは、何の木  
を使ったのですか。)  
“タシロ、1番最初は、やっぱりこれだね。  
イタヤ(イタヤカエデ)だね。うん。イタヤ。  
イタヤばっかりだな”

“(イタヤカエデは)俺大好きなんですよ。  
これ、模様彫るのにね、硬いんだけどすごく  
言うことを聞いてくれるっていうのかな。  
俺の言うことをよく聞いてくれる。  
その代わりすごく苦労させられるけど。”

“やっぱりね、握った感じが良い方がいい  
ですよ。ただゴツンとゴツいより、ちょうど  
いい感じでこう、振り回したり、やっぱり  
使いやすい方がいいからね。”

(木と木を合わせる際、木の向きに何か  
決まりはあるのですか。)  
“決まりというか、俺は木は天に向かって  
立っているんだから、下は下、上は上。  
そういう風に使ってる。”

“俺は自分がせっかく自然に生えている木を  
いただいて、それを使うんだから、立って  
いるままで使ってやろうってことで作って  
いるんだけど、別に何の意味もないかも  
しれない。”

(ウロコ彫りをする前に、表面を削るのは  
なぜですか。)  
“それをやらないと、この厚さがわからなく  
なる。いい加減にやっていると、右と左の  
厚さがわからなくなるから、必ず丁寧にやら  
ないと、あとでいびつになったりするから。”

(彫り方・削り方で頻りに道具を変えるのは  
なぜですか。)  
“大雑把なノミは大雑把にざざざとやる  
から、スーッと切れない。それで平ノミも  
何丁かで、力を入れてガリッとやるのと、  
あと、かんなかけるみたいにスーッと削れる  
ように使い分けている。”

“やっぱりできるだけ綺麗に削り跡を綺麗に  
したいからね。その辺はこだわっているん  
じゃないかな。がさっ、がさっとやるのは  
あまり好きじゃないから。”

“出来上がったときにできるだけ美しく。  
見た目もいように。そっちの方も一生懸命  
やりたいもんでね。”

“できるだけ機械で作ったくらいびしっと  
本当はやりたいんだけど、そこができない  
けどね。それに近づくために、できるだけ  
綺麗にして、とにかく綺麗にして。”

# わざ 技

Hands and Hearts  
vol.5





杉村 忍  
Shinobu  
Sugimura

<略歴>

1947年 旭川市に生まれる  
札幌市在住。木彫りや刺しゅう、編み物などあらゆる工芸を得意とする。  
アイヌ民族の伝統を未来に伝えたいという思いから結成された「アンコラチメノコウタラ」の一員として、各地でアイヌ古式舞踊を披露するなど、アイヌ文化の普及に大きく貢献し続けている。  
「アンコラチメノコウタラ」は「ありのままの私たち」という意味。

<受賞歴>

- ・北海道アイヌ伝統工芸展 優秀賞 (2014)
- ・アイヌ文化振興・研究推進機構 (現アイヌ民族文化財団) アイヌ工芸作品コンテスト 優秀賞 (1999) 入選 (2004) 奨励賞 (2004、2007、2017)

(木の削り方など、お母様から教わったのですか。)  
“テレビも何もない時代だったので、母親の仕事を毎日見ている。中学3年生の時には作りました。”

(トムシとはどういったものなのですか。)  
“最初は何て言うんでしょう、大きいのを1個作って、赤ちゃんのおもちゃだったみたいです。ガラガラみたいな。それを乱暴に振り回して壊したりすると、「それだけ大きくなった。よかったよかった」って、怒らないって話は聞いてますね。”

“この削り方が母親の削り方なんですよね。長めになっていくのが。真っ直ぐにする人とか、丸くする人とかいるんですけど、この形が母親のやり方。それだけは守ってますね。これでどこにあっても、うちの姉が作ったやつなのか、母が作ったやつなのか分かるんですよ。”

“ほとんど箸と茶さじはオンコしか使ってなかったですね。なんでオンコ使ったのか分かんないけど、ほとんどオンコしか使ってるの見たことないです。粘り強い木なんですって。オンコって。”

“例えば洗ったりすると、製材した材料だと、濡れると曲がるらしいんです。そうやって言っていましたね。だから、必ず、割った材料じゃないと、箸は作っちゃダメって母親はよく言っていましたね。”

“刺しゅうばっかりやっていると木を触りたくなってくるんですよ。手がね。だからそれでやると、木彫りやって、嫌になったら刺しゅうやってって、わがままなことしてますけど。”

(彫っているときはどういったことを考えているのですか。)  
“形のことかな。こんな形かなとかって。ほとんど無かな。ほとんど無かもしれない。”

“好きだったんだと思いますね。たぶん。いまだにやっているってことは好きだったんでしょうけどね。おかげさ言ったらもう60年やってますからね。もう。”

(木を使って物を作ることの魅力を教えてください。)  
“これはもう出来上がりが楽しみですよね。形は決まっているんですけど、茶さじだったら、この模様が今度できたらどんな模様にしようかとか考えながらやるんで、それぐらいですよ。でも、本当に形になるっていうのが、嬉しいですよ。出来上がるのがね、楽しみです。”

“こうやってできるのがまだ元気な印だし、母親の仕事を頑張ってるっていうのがね、まあ教わったわけじゃないけど、繋がってきてるのがいいかなって思います。”



八重 清敏  
Kiyotoshi  
Yae

<略歴>

1955年 釧路市に生まれる  
鶴居村在住。16歳から木彫りを仕事とし、今もなおアイヌの木彫りの技術を生かしたアクセサリーや小物類を製作している。  
アイヌ語やアイヌの精神分野に精通しており、第1回札幌国際芸術祭 (2014年開催) では、オープニングセレモニーで行われたカムイノミで、祭司を務めた。

<受賞歴>

- ・北海道アイヌ伝統工芸展 北海道知事賞 (2007、2010) 優秀賞 (2011)
- ・アイヌ民族文化財団 文化奨励賞 (2020)

(彫刻をした、1番古い記憶を教えてください。)  
“小学校の授業でその、石鯿に彫刻をするっていう、昔の固い固形石鯿に彫刻するっていう授業が美術にあって、そんな時に熊彫ったんだよね。その石鯿に。それがその、点数的に見てたら俺のが点数1番良かったかなって思って。で、俺ってけっこうセンスあるのかなってそんな時は思ったんだけど。それが初めて。”

(お客さんに喜んでもらうために工夫していることは何ですか。)  
“自分としてはね、これあの、昔はみんな本州から来た人たちが買うもんだっていう意識で、意識っていうかそういう感じで作ってたと思うけど、今は道内の人結構買ってくれるもんだから、道内向けにも、そのなんていうかな、北海道で身につけてもいいような、そういうデザインのものにしていこうかなって。”

(彫刻刀の使い方意識していることは何ですか。)  
“あんまり、自分では深く彫ってないと思ってるんだけど、まあ色を入れたりするのに合わせて、それに合わせた彫りだね。あの茶色を入れるときにはちょっと深めに彫るとか、色を入れるときには浅めに彫るとか。”

“やっぱり模様の中で、なるべくモレウっていかさ、そういうものに近いような模様を彫っていかうかなって思っている。”

“自分の模様ってほしい決まってるから、それを色々アレンジしながら、そんな時に考えながらやっていく。”

“カムイノミっていうものを覚えたくて、そのためにはパスイ、自分で作ったパスイがいいなって思って、パスイ勉強してパスイ彫るようになったよ。(勉強というのは) 要するに本当に古いアイヌ文様ちゅうのはどういふものか。そこでウロコ彫りとかそういうものを覚えた。”

“やっぱりカムイノミ、アイヌの基本はカムイノミだと思っているから。”

(彫り物を教えるときに重視していることは何ですか。)  
“とにかく彫り物は、焦らないでゆっくりやるのがうまく彫れる、彫るコツだっって教えてる。”

“人の真似だけしてはやっていけないと思うんだ。やっぱり自分でオリジナルを作ってる。”